

## 「サリドマイド薬害～たった一錠の薬によって～」

兵庫県 奥埜章子

本日はサリドマイドという薬害のことを少しでも皆さんに知ってもらいたい、また忘れ去られないことを願ってお話いたします。

今回お話しさせていただくことになり、改めて私の生い立ちについて母にインタビューしました。

父は会社員で転勤族でしたので、当時仙台に住んでいました。母は流産の経験があったため、私を妊娠してそれはとても嬉しかったそうです。ところがまた流産しそうになり、絶対安静の為に産婦人科に入院したのです。入院した日は大部屋しか空いておらず、昔ですので新生児や婦人科の患者さんも同室で、赤ちゃんが泣いたりで一晩中眠れなかったそうです。医師にそのことを告げると白い一粒の薬を処方され、何の疑いもなく飲んだそうです。翌日には二階の静かな部屋が空き、薬を飲んだのはその一度きりと聞きました。その後、安定期に入り、また父の転勤で東京に移り、私は1962年に東京で生まれました。出産後、女の子であることや体重は告げられましたが、障害があることはすぐには告げられず、少ししてから手や足(足は問題なかったのですが)に障害があると言われたそうです。その時は、原因などまったく分からず、母は心ない人から信心が足りないからではと責められたりしてとても悲しかったこと、今でも忘れられないと言います。退院してからは短く曲がっている手が、少しでもまっすぐ伸びるように願ってマッサージに通ったり、帝京大学病院で手術をしてくれる医師がおられると聞いて訪ねてくれました。まだつかまり立ちするかしらないかの頃、欠損している橈骨のかわりに尺骨の位置をずらす手術を受けました。父も会社帰りに毎日見舞ってくれたそうです。

小学校入学の頃、大阪に引っ越しました。普通学級に入れるか事前に親が校長先生と面接し、入学出来ました。小学校で初めて、健常者と違うことを認識したように思います。特に体育です。鉄棒、とび箱、野球、バレーボール、水泳など上手く出来ませんでした。手をつなぐフォークダンスも嫌だったこと思い出します。また音楽でも楽器のリコーダーやオルガンに大変苦労しました。小学校低学年の夏休みには大阪市立大学病院で人差し指と並んでいた親指を物がつかみやすくなるような手術も受けました。

大阪に越したころには、新聞等でサリドマイドの被害であることも報道されて、手や耳などに障害のある子が沢山生まれたことも分かりました。

中学、高校思春期には人から手を見られることがとても嫌でした。高校は電車通学だったので、常に人目を気にしていました。サリドマイド被害者の集まりに参加することも、他の被害者の方を見ると自分の姿を客観的に見ることになり実はすごく嫌でした。

結婚の時には、相手の両親に母が障害は遺伝ではなく薬害であることを説明してくれました。出産の時に私は、生まれた娘の手に障害がないか一番に確認しました。薬害と分かっているにもかかわらずとても心配だったのです。

さて、現在は老化現象が悩みです。腕や手の痛み痺れもだんだんひどくなっています。末梢血管が発達していなかったり、目に見えない影響があり老化も早いようです。

母が飲んだのは、一錠の薬でした。

たった一粒の小さな薬の副作用が大きな大きな悲しい出来事を起こしたことを知ってもらいたい。また一瞬だけでなく一生涯続くこと、また本人だけでなく家族にも及ぶこと知ってもらいたいと思います。本当に両親には苦勞かけたと思いますし、両親が一番の被害者だと思います。

製薬会社には薬を作るとき、慎重に慎重にお願いしたいし、国もしっかりと検査して認可してほしいと思います。

「たまたまわからなかった」や「外国で認可されているから大丈夫」ではすまないと思います。二度と薬害が起こらないことを願います。

最後に今コロナウイルスが流行し、ワクチンについて効き目かどうなのか、また副反応について様々な情報が流れています。

世界中の大勢の人が薬について考える機会となっています。因果関係は不明とされていますが亡くなった方も大勢おられます。非常事態とはいえとても怖いのです。後々副作用が起こらないか心配です。皆が安心して打てるワクチン、また治療薬を是非とも作ってほしいと思います。

#### 《プロフィール》

1962年生まれ 59才 27才で結婚、30才で娘を出産、現在は兵庫県で夫と2人暮らし。仕事は損害保険会社に勤務しています。両上肢に障害があり、右手の方が短いため、左利きです。今年6月に公益財団法人いしずえの理事に就任しました。